

引き抜き屋の微笑

雫井脩介

第六回

引き抜き屋の戸惑い（二）

3

1

「いやあ、宝飾業界ほうしよくのドンである大橋会長おおはしのお役に立てるとなれば、これはもう、恐悦至極きょうえつしごくに存じます。何しろ私は、大橋会長の生き方に大変な感銘かんめいを受けておるわけでありまして、こう言ったら失礼ですが、官城の小さな町から大都会東京に出てきて、こうして、きらびやかなブライダルジュエリーの世界で成功を収められた。そういった苦勞や田舎あかの垢あかといったものをまったくうかがわせない、洗練せんれんされたお姿。まさに成功者せいこうしやというのは、こういうもののだなと思わわけです」

やらいふじお
矢来富士夫が並べてみせた美辞麗句に、「オオハシジュエリー」
会長の大橋がまんざらでもなさそうな顔をして手を振った。指に嵌
めたダイヤモンドのリングがホテルラウンジの柔らかい照明を反
射してきらきらと輝く。

「馬鹿言っちゃいけないよ。私は大いなる田舎者を自負していてね、
外見はどうあれ、中身は向こうにいた頃から何ら変わっちゃいない。
さらびやかなものに対する憧れが相変わらずあるからこそ、この仕
事にも情熱を傾けられるんだよ」

「これは嬉しい！」矢来はすかさず言った。「私も、縁あってトンペ
ーで青春時代を送り、杜の都を愛した身。社長の心に望郷の思いが
棲みついていると知って、感激の至り、もう胸がはかかするで
す！」

「ほう、あんた、見せてもらったプロフィールには、フランスの何
とか学校でMBAを取ったとか何とか書いてあっただけだったが、
トンペー
東北大さんだったのかね？」

「うんだでば」矢来はうなずいてみせる。「ほいな、社長には東北の
星として輝いてほしいという思いがあるんですが。したっけ、今回の
案件はぜひ、私さ任せて下さい」

「ふむ」大橋は思案顔になる。「しかし、聞けば、ヘッドハンターと
いうのは、ほかにもいっぱいあって、何人かで事務所を構えて協力

し合いながら人を探すようなところもあるらしいじゃないか。だから、そういうところにも一応、相談してみてだね……」

「いやいや、社長、それはいけません」矢来は懸命に声を張った。「大手ファームといえども、一件の話に動くのは一人。同じことです。もし三人で探すというところがあったなら、そこは単に三倍の報酬ほうしゆを取るだけです。しかもです、大手ファームは日頃から付き合いのある会社を優先しますから、新規は前受け金だけでもらって、なかなか手をつけようとしません。私は同業者のそういう悪評を何回も外で耳にして、これは業界のイメージダウンにつながるから、ほとんど困っておるんです。そこへいくと、私は、本来であれば前受けを頂戴ちやんたいしておるんですが、社長のような、末永くお付き合いさせていただきます。成功報酬でやらせていただきます。不肖ふしやう矢来、ヘッドハンティング業界がまだ海のものとも山のものともつかなかったバブルの頃から、かれこれ四半世紀をこの世界で生き抜き、何万というエグゼクティブを見定めてきた経験がございませよ。一人だろうと、大手ファームには負けません。ぜひ私にお任せくださいませ」

「そうか」大橋は少し考える間を置いてから、踏ん切りをつけるように言った。「分かった。じゃあ、あんたに任せよう。我が社の未来が懸かっておるんだから、いい人間を見つけてきてくれよ」

「ありがとうございます。お任せください」

矢来はそう言って、うやうやしく頭を下げた。

大橋との商談を終えた矢来は、そのまま、シャングリ・ラホテル東京の二十八階ラウンジに残った。このあともここで、クライアントとの打ち合わせが二件控えている。

飲み物を替えてもらおうと、スタッフの姿を探しながら、振り向きざま手を上げたところ、フロアを歩く男と視線が合った。

「これはこれは、戸ヶ里殿」

丸の内界隈のホテルラウンジはヘッドハンターそうくつの巢窟そうくつで、このホテルも御多分ごたぶんに洩れない。先ほどまでは見かけなかったから、ここからは死角となる、壁の向こうのVIP席で誰かと密談でもしていたのだろう。

「何かいい話でもありましたかな？」

「いえいえ」

矢来を見て一瞬、わずらわしそうに眉まゆを動かした戸ヶ里は、軽くあしらうことにしたらしく、短く言葉を返してきた。

感情をめったに表に出さず、すべての事柄があたかも想定内であるかのように振る舞うこの男を、矢来は苦々にくにくしく思っている。何度かクライアントを取られ、痛い思いをしてきたことも手伝ってのこ

とである。まだ、並木なみきのほうが可愛げがある。

この男が「ルイスラザフォード」の最年少プリンシパルとして業界内でも名を馳はせていた渡会わたらい花緒里かおと結婚したときには、矢来も仰あや天てんしたものだ。二人ともプライドが高いエリートであることは変わりなかったが、性格的には水と油のように思えたからだ。

だから、二年かそこらで離婚したときには、意外と長く続いたものだとさえ思った。

敏腕びんわんヘッドハンターといえども、自身の伴侶はんりよとのケミストリーを見定めることさえままならない……人間という生き物の複雑怪奇さがなせる業わざであり、だからこそ、人材ビジネスが難しくも面白いものだという証しやう左さでもある。

矢来が見るに、花緒里は離婚を経てから、自分の眼力がんりきでどんな人物をも見極められるというような驕おごりを捨て、ヘッドハンターとしても一皮むけたように感じられる。ウオートンスクール出身というプライドもどこかへ置き、夜はいとこのママがやっている銀座のクラブで、財界人らを相手にせつせと酌しやくをしているという。そこまでやられると、ヘッドハンターとして勝ち目はないと、矢来も白旗を上げたくなる。

それに比べて戸ヶ里は、離婚さえも想定内だったかのような顔をして、以前と何ら変わらない振る舞いである。

それはそれで、不気味ではあるが。

「そう言えば花緒里さん、この前、色っぽい服を着て、「ガルウイング」グループの岩清水社長いわしみずと銀座の街を仲よさそうに歩いておりましたな」

「そうですか」

少しは眼鏡めがねの奥の涼しげな目を泳がせてやろうと思っただけなのだが、戸ケ里は何の動揺も示さなかった。

そのまま彼は、矢来から視線を外し、ラウンジを出ていこうとする。どちらにしる、ヘッドハンター同士で積もる話があるはずはなく、矢来は肩をすくめて、その彼を見送ろうとした。

しかし、意に反して、戸ケ里はきびすを返し、矢来のもとに近づいてきた。

「ところでムッシュ、リストラ屋は探してませんか？」

「リストラ屋？」

不景気の頃はそういう案件も飽きるほどあったが、今はほとんど無いこんでこない。

「いや、別にリストラ案件じゃなくてもいい。もちろん、普通の経営もできますよ」戸ケ里は言う。「HBS時代の私の友人でしてね、優秀な男です」

「ほう、誰ですか？」

「山室久志。今は「モリヨシ」の社長をやってます」

「文具の「モリヨシ」ですか。確か以前は経営難がささやかれてましたな」

「ですが、彼が立て直しました」

「ほう、そりや確かに優秀そうだ」矢来はそう応じながら、訝しく

戸ケ里を見る。「しかし、そうなら、友人のあなたが探してあげればいいのでは？」

「そうできればいいんですが、彼もなかなか気難しいところがありましてね」

「友人の世話など受けたくないと……？」

「まあ、そういうところです」戸ケ里は言った。「手頃な話があったら、声をかけてやってください」

「いいでしょう」

キャンディデートが増えて困ることは何もない。戸ケ里の口から無償でこんな話をもたらされることに気味が悪い思いが湧かないこともなかったが、彼は無能な人間を自分の友人だと公言するほどプライドのない人間ではない。

戸ケ里は、矢来の返事に満足そうにうなずいてから、一言付け足した。「あ、私の口添えがあったということは、内緒にしておいてください」

よほど向こうもプライドが高いのか……よく分からない。

戸ケ里は念を押すようにもう一度うなずき、それから矢来に背を向けた。

山室が戸ケ里の言葉通り有能であるなら、ちょうど引き受けたばかりの「オオハシジュエリー」の社長はどうかと思った。娘婿むすめむこの社長が家庭不和の末、娘を溺愛でんあいしている会長に追い出される羽目はめになった。当面は会長が社長を兼務するが、会長は会長でハワイでの生活が気に入ってしまい、何とか早く後継者を見つけないという事情がある。

ワンマン会長なだけに、後継者には会長との相性が重要なカギとなる。だが、それはそれとして、この手のサーチでキャンディデイトを挙げるとき、矢来のみならずヘッドハンターが意外と重視するのは縁である。「オオハシジュエリー」の依頼があり、そのすぐあとに、山室の話を聞いた。このタイミングのよさは、一つの縁と言い換えてもいいものだ。

矢来は打ち合わせの用事を済ませて月島つきしまの雑居ビルに入っている事務所に戻ると、山室の経歴を調べることにした。矢来の名刺には日比谷ひびやの住所が記されているが、それは郵便物を受け取ってくれるレンタルオフィスだ。どうせ仕事関係者と会うのは相手の会社か

ホテルのラウンジあたりであり、事務員も雇っていないので、事務所などいくら汚くても構わない。ぱりっとしたスーツを着て名刺を渡せば、日比谷のさぞかしモダンなビルの一室に事務所を構えているのだろうと、相手は勝手に思ってくれる。

山室久志、四十七歳。横浜国立大学卒。ハーバード・ビジネス・スクールでMBA取得。紳士靴販売チェーン「メンズシューズKUNO」常務。オーディオ機器メーカー「ブルースター」社長。カラオケ店チェーン「みんなの十八番」社長。

ネットや手持ちの業界誌などを漁って調べてみると、こんな経歴が浮かび上がってきた。

どこも業界トップ級の会社ではない。「リストラ屋」と言っていたから、おそらくは経営危機だったところに呼ばれて、メスを入れ、それなりに乗り切ることと名を売ってきた人間なのだろう。

「もしもし、矢来ですが」

矢来は旧知の業界新聞や業界誌の記者に電話してみた。矢来自身、若い頃は小さな業界新聞の記者として飯を食っていた。持ち前のねちっこさと機を見るに敏の対応力はそこで培った。

「山室さんねえ。噂では聞いてますよ。名門ビジネススクール仕込みのコストカッターだとか。「KUNO」なんて、いつつぶれてもおかしくないような会社を救ったんだから、優秀なんじゃないんです

か)

「いやあ、私はああいう、壊すしか能がない経営者は買いませんね。

実際、壊すことしかしてないでしょう。人の首を切るのが快感なんじゃないかってくらい、容赦ようしやないらしいですよ。本当か嘘か、リストラされた社員に刺されたなんて話も聞いたことがありますけど」

聞いてみると、毀誉褒貶きよほうへんとも言うべき、いろんな声が出てきた。

「実際に会ったことありますけど、感情が読めないっていうか、何考えてるか分かんないような人ですよ。こういう人じゃなきゃ、ばっさばっさ人は切れないんだろうなって思いましたよ」

本人と会ったことがある者からはそんな話も出てきて、矢来は逆に山室という経営者にいつそう興味が出てきた。

キャリアを見ると、本当にリストラやコストカットだけをやってる人間に見える。存分に人を切り、不採算事業をつぶし、当面の危機を脱すれば、次に移っていくわけだ。

それ以外の経営には関心がないのだろうか。

一度、会ってみたくなくなった。

「モリヨシ」は東京スカイツリーにもほど近い、押上おしあげの古びたビルに会社を構えていた。

エントランスには各種文房具商品がガラスケースに収まって、品

よくディスプレイされている。照明も落とし気味で華やかさはないが、こだわりの文具を作り続けている優良企業の雰囲気ふんいきはある。

夕暮れ時に訪れた矢来は、その会社の前をぶらぶらしながら、山室が出てくるのを待った。スーツから地味なブルゾンスタイルに着替え、マスクをしている。サルバドール・ダリもどきのカイゼルひげを隠すだけで、立派な変装になる。気分は張りこみ中の刑事と変わらない。

矢来は気になるキャンディデートにアプローチしようとするとき、よくこうした手を使う。まず、相手に悟さとられないように、生の姿なまを見る。それによつて、どうアプローチするべきか考えるのだ。

その日、山室はもうすぐ九時に差しかかるかという時間になつて、ようやく会社から出てきた。

まだ若いからだが、身体つきががちりしていることもあり、エグゼクティブとしての風格を持つている男だった。それまでこのビルのエントランスを出入りしていた者とは、漂たわらせている雰囲気において、やはり一線を画している。くたびれ感がない。太めのレジメンタルタイを隙なく締め、ブルックスブラザーズ的なアメリカントラッドのスーツでかっちりと身を包んでいる。

山室は電車通勤のようだった。社長とはいえ、会社の業績はぱつとしていないようだから、致し方ないのだろう。満員電車にも無表

情で揺られていた。

そして、どこにも寄ることはなく、西船橋にしふなばしの小さなマンションに消えていった。何の変哲もないマンションだ。新たに明かりがつく窓がないところからすると、家族がいて、すでに明かりがついている家に帰ってきたということのようだ。

意外と面白みに欠ける生活をしている。書店に寄って趣味の本を探すとか、飲み屋に寄って一杯引っかけるとか、そういうこともない。大事なのは家族で、趣味は仕事……ありがちなエグゼクティブ像をさらに地味にしたような男に見える。

案外、常識的な人間なのかもしれない……矢来は思う。リストラ屋などと揶揄やゆするように呼ばれているが、健康体の会社も経営してみたいのではないか。

それからまた数日して、夜に身体が空いた日、矢来はまた押上に向かった。

この日は、いつも愛用しているチフォネリのスリーピースを着たままだった。ひげも整髪剤できれいに形を整えている。

八時すぎに山室が出てきた。社員が遠慮がちに会釈えしやくする横を、無表情で歩いている。

矢来は通行人を装い、彼の正面から近づいていく。

「ジュスイ、ディゾレ」

強めに肩をぶつけ、すかさず詫^わびを入れた。

反射的に口にした体のフランス語に、山室は怪訝^{けげん}そうに矢来を見やる。

「失礼。大丈夫でしたか？」

がっちりした肩にぶつかり、痛いのは矢来のほうだったが、表情には出さず、日本語で言い直した。

「大丈夫です」

山室の答えも聞こえなかったかのように、矢来は目を見開き、山室の顔を覗^{のぞ}きこむように見た。

「ええと……お名前が出てこなくて申し訳ないんですが、どこかでお会いしておるか」と

「人違いでしょう」山室は記憶をたどるような合間もなく、そう答えた。

「矢来です。人材コンサルタントの矢来です」

そう言ってももちろん、山室は知らないとはかりに首を振るだけだ。

「いや、そうですか」矢来はひとしきり戸惑ってから、笑ってみせた。「私は割と印象に残るタイプの人間だから、あなたが知らないと言うなら、そうなんでしょう。何せ、年に千人、二千人のエグゼク

タイプと会っておるんで、こういうこともよくあるんですよ。あなたも見るからに、どこかの会社のお偉いさんだ。だから、間違ってしまったのかもしれない」

「お会いしていたら、憶おぼえていると思います」

山室は淡々たんたんとそう言っつて、ゆっくり歩き始めた。不愛想だが、短気たんそうではない。

矢来は彼の背中を見送ったあと、「モリヨシ」の玄関前にいた社員らしき三十代の女性のとこところに歩み寄った。

「今、あそこでおぶつかつった人、どこかで見た気がするんだが、この人ですか？」

女性はちらりと山室の背中を目で追っつてから、うなずいてみせた。

「社長ですよ」

「あ、社長！」矢来は額を押さえた。「これまた、えらい人とぶつかったもんだ。いやあ、左によけようとしたら、あの人も左に来て、右によけようとしたら、あの人も右に来て……ちよつと怒ってたかなあ。どんな人？」

「いや、そんなことでは怒らないと思いますけど」女性は苦笑気味に言う。

「でも、けっこう、ピリッとした感じだったねえ。怖い社長じゃないのかな？」

「いや、直接話したことはないんで分かんないです」女性はその言いながらも、口が軽いのか続けた。「でも、怖いと言えば怖いのかも……いろんな意味で」

「ほう、その心は？」

「会社の景気が悪かったときは、ばんばん人を切ってましたからね」

「ははは、でも、それは仕方なくでしょう」

「平気な顔して切るって、よく言われてましたよ」

「そんな……血も涙もないようなことやったら、切った相手に恨みを買うだけでしょう」

「実際、前の会社では、切った相手に刺されたとか襲われたとか噂も聞きましたよ」

「まさか……そんな傷を抱えてるようには見えなかったけどね」

「人の痛みを感じないんじゃないかって言われてますからね」女性
は皮肉っぽく言った。「自分が刺されても痛くなかったのかも」

「こりやまた、ずいぶんな言われようだ」矢来は乾いた笑い声を立てた。「じゃあ、さっききぶつかったのも、平気だったかな」

「そうなんじゃないですか」

社長と直接触れ合う立場ではない社員の話であるだけに、この声をもってリファレンスとするわけにはいかない。むしろ、こんな声がリファレンスで出てきたら、どこのキャンディデートにもできない

い。

よそ者社長が乗りこんできて、会社を引っかき回してくれた……女性
の口ぶりには、そんな恨み節ぶしがこもっていた。そのあたりは少し差つ引いて受け取らなければならない。

凡百ほんひゃくの経営者なら見切ってもいいのだが、そのキャリアからは有能さの片鱗へんりんをちらつかせている。有能であれば、キャンディデイトに欲しいのである。戸ケ里が推おしていたのも気になる。

三日後、矢来は、山室へのアプローチを次の段階に進めることにした。

「モリヨシ」についても、少し調べてみたが、ここ数年の経営不振から脱し、来期は黒字見通しであることが分かった。明らかに、山室の再建策が功を奏そうした形だ。それを知ると、やはりそそられるものがある。

「ああ、もしもし、私、「矢来コンサルタント」の矢来と申しますが、山室社長はおられますかな」

次の段階というのは、直接電話することである。名前と顔は、こういうアプローチをしても難なく相手をしてもらえるほどには印象づけてある。

〈もしもし？〉

山室も多少怪訝な声音こわねではあったが、電話を取ってくれたようだった。

「いきなり電話してすみませんね。「矢来コンサルタント」の矢来富士夫でございます。いやあ、この間は失礼しました。あるとき、近くにいた人に訊きいたら、やっぱり、「モリヨシ」さんの社長だつて言うじゃないですか。確かに私、お会いしたことはなかったんですが、業界紙か何かでお顔は拝見していたんでしょうな。だから、どこかであったような気がしてしまつたんです。とにかく一度、改めて、お電話しないと思ひましてね」

「……この間のことでしたら、大丈夫ですよ。どこも痛めていませんし、どちらが悪いというものでもないことですから」山室は冷静な口調でそう返してきた。

「いや、もちろん、「モリヨシ」さんの社長が、ああいうことでいつまでもご立腹されておるとは思つていませんよ」矢来はまくし立てる。「ただね、この間もちよつと申し上げたと思うんですが、私は毎日のようにいろんな会社のエグゼクティブと会う仕事をしておるんです。エグゼクティブを見つける仕事と言つてもいいでしょう。一口くちにコンサルタントと言つてもいろいろあるんですが、私は経営幹部の人材紹介を専門にしております、早い話がヘッドハンターと呼ばれる人間なんですな。この道四半世紀以上、外資大手の「ルイ

スラザフォード」が日本に進出する前から、この仕事を生業なりわいにして
おる人間です。そういうことなものですからね、こういう縁がある
と、大事にしたいわけなんです。私の手もとには、いろいろいい話
もございますよ。一度、お時間があるときに、改めてお会いして、
少し話をさせていただければと思うんですが、いかがでしょうか
ね？」

〈知人にヘッドハンティングの仕事をしている者がいますので、そ
の世界のことは少し分かります〉山室は答える。〈何かの話のキャン
ディデートに私をということであれば、辞退させていただきます〉
「いやいや、そんな、構えなくてけっこうですよ。私も文具業界に
は何人か知り合いがいます。ちよつとした情報交換的なものでいい
じゃないですか」

〈申し訳ないですが、遠慮しておきます。今は仕事に集中したい時
期ですの〉

警戒されているわけでもなさそうだが、食いつきが悪い。

「もしかして、その、知り合いのヘッドハンターの方に遠慮されて
おるんですか？」

〈そういうわけではありません〉山室はきつぱりと言った。〈時期が
合っていれば、どなたの話でも聞くつもりです。ただ私は、今の会
社でまだまだやり残していることがありますの〉

「モリヨシ」さんは、山室社長が来てから経営不振を脱し、黒字も見えてきていると聞きますな」矢来は自分の調べを披露して踏みこんだ。「社長のリストラ策が奏功したということでしょう。結果は出ました。そろそろ次の舞台を探してもいいんじゃないですか。社長の売り時は今だと思えますよ。例えば、私のところには、銀座に本店を置くブライダルジュエリーの会社が社長を探してほしいと依頼してきております。年俸は五千五百万。悪くはない話だと思いますよ。もちろん、今の会社でもっともらっていらつしやるなら、別ですが」

集めてきた情報から、山室の報酬はせいぜい二千万前後という読みがあり、矢来はそう迫ってみた。

しかし山室は、検討するような間まを作ることもなく応えた。「魅力的な話だとは思いますが、今は興味がありません。私はまだ、「モリヨシ」での仕事をやり残しています」

「社長はリストラの手腕を買われて、「モリヨシ」に招聘しょうへいされたんです。それで引き受けて、結果を出された。もう十分じゃないですか」

「一応のところ、会社が立ち直ったのは確かですが、リストラはまだ終わっていません。中途半端に済ませることはできません」

山室は希望退職や個別勸奨かんじょうで、中間管理職を中心に百人以上の社

員を会社から追い出したと聞く。それで収益は改善したはずなのに、まだリストラは終わっていないのか……山室の淡々とした口調も手伝い、矢来は薄ら寒い思いにとらわれた。

「社長、お節介せっかいを承知で申し上げましょうか」矢来は言った。「あなたは、徹底的なリストラで会社をよみがえらせる手腕を自分の売りに行っているつもりか分かりませんが、そういった色を自分につけすぎるのは損ですよ。『リストラ屋』とか『コストカッター』みたいな呼ばれ方は、やゆ 揶揄と紙一重かみひとえです。それしかできないと思われるでしょう。そろそろ、違う形の経営の手腕も発揮されたほうがいいでしょう。それには、舞台となる会社を変えたほうがいいことですよ」

「ご忠告はありがたく頂戴しておきます」山室は感情のこもっていない口調で言った。「ただ、私は今の仕事にやりがいを感じています。それしかできないと思われようが、私は逆に、この仕事は自分にはできないと思ってやっています。人にどう思われるのかは関係ありません」

「……そうですか」
強固な意思表示の前に、矢来はどうとう、口説き続ける言葉をなくしてしまった。

いったんリストラに手を出すと、人を切っても切っても切り足ら

ない、強迫観念のようなものが芽生えるのだろうか。

それとも、それで数字が改善したことにより、魔法の杖を手にし
ているような、中毒性を感じてしまうのだろうか。

面白いタイプだとは思いますが、経営者としてはゆがみすぎている。

キャンディデートとしては何とも扱いにくい男だと分かり、矢来
は山室への興味が急速に失せていくのを感じた。

それにしても、本人が転職を希望していないのに、戸ヶ里はどう
して移籍先を探してやってくれというようなお節介を焼こうとした
のだろう。今度会ったら、一言文句を言ってやらなければ……そん
なことを腹立たしく思った。

4

「申し訳ありません。先日、真中まなかさんにもご紹介して、気に入って
いただいたキャンディデートのお二方ふたかたなんですが、その後、条件提
示などを含めて打診してみたところ、ちょっと難しいということ、
辞退の返事をもらってしまいました……」

畔田くろだと柴沢しばさわから断りの返事をもらった小穂さほは、仕切り直しのため
の時間をもらうべく、「七村ななむら通商」の真中に電話をして、事情を伝
えた。

「仕方ないですね。乗ってこない人にこだわっても、時間を浪費するだけです。この前のリストにもまだよさそうな人はいましたし、切り替えていきましょう」

落胆らくたんされるかと思いきや、真中の反応は淡々としていて、小穂は少なからず拍子ひょうし抜けした。大手コンサルティングファームの出身者でMBAホルダーなど、駄目だめでもともとだとはなから思っていたのかもしれない。

近日中にもう一度打ち合わせをする確認をして、小穂は電話を終えた。

「鹿子かのこちゃん、何かあった？ 元気なくない？」

木曜の夜、小穂は花緒里の同伴の付き添いで、銀座八丁目の高級鮎屋すしのカウンターに座った。

「ガルウイング」の岩清水が鮎を食いたいと言い、また知人を連れていくということだったので、小穂にも声がかかったのだ。

その岩清水らは、まだ来ていない。

「そうなんですよ」小穂はカウンターの角にはず向かいで座った花緒里にこぼした。「手持ちの案件で、本命のキャンディデート二人に続けざまに断られちゃって」

「ふうん……どこのやつ？」

「スポマート」です」

「スポマート」……？」

「七村通商」の人にお店でたまたま付いて、頼まれたんですよ」

「ああ、紗さやか也加ママのお客さんの？」

係が違うから、花緒里も事情を把握はあくしていないのだ。

「そうです。社長を探してほしいって」

それで畔田や柴沢に打診してみたのだが、断られてしまったのだと、小穂は話した。

「ふうん……「スポマート」って、そこそこ名が通ってるけど、案件は微妙だね。「七村」はあそこ、シビアなビジネスやるからね」

「そうなんですよね。畔田さんたちも、ちょっと匂わしただけで「スポマート」だって分かったみたいですけど、条件がいまいちだから、それだけじゃあ乗ってきてくれないんですよね」

「あの業界って、ほら、今から来る人とかがイケイケでやってるから、「スポマート」なんか意外に厳しいのかもよ。だから、「七村」がテコ入れに乗り出したんじゃないの」

「まあ、そういう一面はあるんでしょうけど」

しかしそれは、逆に言えば、経営者として腕の見せどころではないかと思うのだ。プロ経営者として生きていくならば、そういう仕事こそ手を挙げて引き受け、鮮やかに結果を残してほしいと思うの

は、身勝手な考えなのだろうか。

「七村」は前にもそういうの、あったしね」

「そういうの？」

花緒里の話にびんとこず、小穂が首をかきあげていると、カウンターの板前たちが「いらっしやい」と声を上げた。

「お待たせ」

岩清水がさっそうと店に入ってきた。一緒に現れたのは、小穂も顔を知っている、元オリンピック選手のスポーツキャスターだ。

花緒里との話はそこで途切れ、岩清水たちがたちまち、会話の主役になった。しかし、その岩清水が、ビールで乾杯したのち、「そう言えば、かのこちゃん」と、小穂に話を向けてきた。

「くろべえに「スポ」の話、振ったらしいね」

「あ……」とたんに気まずい思いになり、小穂は反応に困った。

「あいつ、断ってきただろ？」

「……ええ」小穂は苦笑いを浮かべてうなづく。

「俺が断れて言ったんだよ」

「あ、そうなんですか……」

畔田は違うと言っていたが、やはり、岩清水との関係が邪魔をしたのだなと思った。

しかし、岩清水の話は予想していたものからは微妙にずれた方向

へと進んだ。「駄目だよ、あそこは。もうちょっと、いい話を紹介してやらないと、くるべえが可哀想だ」

「やっぱ、苦しいの？」

花緒里の問いかけに、岩清水はうなずく。

「赤字店ばっかだからね。相当なリストラしないと、上がり目がないよ、あれは」

「やっぱりね……だから、「七村」が動いてるんだ」

花緒里は腑ふに落ちたように言うが、小穂は、彼らが語っているものを今一つ把握し切れていない思いがあった。

「連中は、自分たちの手を汚したくないんだよ。社長なんて格好いいポストを用意してるように見せて、やらせるのはクビ切りの汚れ仕事しかないんだから」

「そんなに、ひどいんですか……？」

そう確かめた小穂の言葉にも、岩清水はうなずいた。

「店、覗いてみたことある？」

「……七、八年前に」

「駄目だよ、商売なんて、半年でがらっと風向きが変わるんだから。もう一回、覗いてみな。見りゃあ、分かるから」

「はい……」

小穂は心臓をつかまれたような思いで返事をした。

翌日、小穂は、東大和ひがしやまとの新青梅街道しんおうめ沿いにある「スポマート」東大和店に行ってみた。

「フオーン」の新人研修で見学に来たとき、「スポマート」の店内は活気に満ちていた。色とりどりのスポーツウェアが広いフロアを埋め尽くし、スポーツトレーナーがイベントスペースでマイクを使った講習会を開いていた。スタッフが忙せわしなくフロアを歩き来し、商品をかごに入れてショッピングを楽しむ若者の姿も目立った。

しかし、七年ぶりに訪れた「スポマート」に、当時の面影おもかげはなかった。とにかく、客が少ない。

ざっとフロアを歩き回って見かけたのは、二、三人だ。レジにはスタッフが一人いるだけで、三台のうち二台は閉まっている。

照明もいくらか間引いて使っているようで薄暗い。店内放送も、以前はシーズン商品の賑やかな販促アナウンスが流れていた気がしたが、今はただのBGMだ。

商品も心なしかボリュームが足りない気がする。ウェア一つとっても、以前なら左右の商品を手で押さえながら目当ての商品を引き抜くような詰め具合だった気がするが、ざっと見るだけでも、今は明らかに品ぞろえがまばらなハンガーラックがある。

奥にあるアウトレットコーナーは、街で言えば場末ばすえのような、寂れた空気が漂っていた。

「フオーン」のトレッキングウェアも置いてある。アウトレット品と言えば聞こえはいいが、マレーシアの技術提携工場で厳格な工程管理のもと製造している主要ラインの製品ではなく、ほかの大衆向け衣類などの依頼も引き受けている中国の工場に生産委託した、エントリーラインの商品である。

デザイン的にも、身体にシェイプするようには作っていない。どんな体型にも合うよう、通常のサイズよりも緩ゆるめに作っている。構築も立体的ではないから、ハンガーに吊るしても、ぺたんこ平べったくなくなってしまう。

安物はブランドの価値を落とすだけだから、作るべきではないと、小穂は父に進言したことがある。

しかし、普段アウトドアに興味がない人が、付き合いでどうしても参加しなければならぬとき、なるべく安上がりにそれっぽい装いを整えたいと考えるわけで、そんなケースではこういうエントリーラインが役に立つのだと、父は言った。それでアウトドアに嵌はまり、本格的なフィールドギアに興味を持つ「フオーニスト」が誕生するかもしれないのだと。

そんなふうには話を聞けば、その言い分にも一理あるとは思った。

しかし、こうやって、マウンテンパーカーが三千円台や四千円台の値札を消されて千九百八十円で売られているのを見ると、何だか切ない気持ちになる。しかも売れていない。型も二、三年前のものだ。

沈んだ気分でアウトレットコーナーを離れた。安物さえ売れていないとなると、この店の現状は推して知るべしである。

帰ろうかという気になって、入口のほうに戻っていくと、スポーツシューズのコーナーで商品整理をしているスタッフの姿が目にとまった。

四十代のひよろりとした男だ。以前、新人研修のときに、フロアやバックヤードを案内してくれた副店長ではなかったか……小穂は彼のもとに近づいてみた。

「いらつしやいませ」

作業をしながら挨拶あいさつの声をかけてきた男に会釈えしやくを送ると、彼は手を止めて、小穂を見返してきた。長岡ながおかと記された胸のネームプレートを見て、そうだったと思い出した。彼には研修のあと、礼状も書いている。

「あの、ご無沙汰ぶさたします。私、以前、「フォン」の研修で、こちらを見学させていただいたときにお世話になりました」

近くを通りがかかったので、懐かしくなって寄らせてもらったと、

小穂は続けた。

「そうですね。わざわざありがとうございます」長岡は人のよさそうな笑みを浮かべて応えた。「案内させてもらったのは憶えていますよ。懐かしいですね」

「どうですか、最近は何？」

小穂は、「フオーン」を辞めたとは明かさずに、そんな問いかけを彼に向けた。

「これから山登りにはいいシーズンですから、ウェアなんかもちよこちよこ出始めると思いますよ」

「そうですね。これからは羽織はおるものも必要になってきますから、動いてきますよね」

長岡のビジネストークに応じてから、店のほうに話題を絞ってみることにした。

「お店の景気はどうですか？」

「いやあ、まあ、なかなか厳しいですよ」

長岡は本音としか思えない言葉をあつさりとかぼした。

「そうですね……スタッフさんも、昔よりは少し減ってますかね？それはちらっと思ってたんですけど」

「ええ、バイトは減らしてますね」長岡は言う。「春は年度初めで、部活とか新しいスポーツに挑戦しようっていう人も多いんで、まだ

いいんですが、それ以外の時期がなかなか厳しくて」

「最近は、「ジョイナス」とか、ほかの大型店もいっぱい出てきてますしね」

小穂の言葉に、長岡は深々とうなずいた。

「正直、それはかなり大きいですね。「ジョイナス」とか「ガルウィング」とか……うちも対抗しなきゃいけないんですけど、お客さんは新しい店、新しい店に行っちゃいますから」

「負けずにごんばってください。長岡さん、前は副店長をやられてたと思いますけど、今は……？」

「いやいや」長岡は自嘲気味じちやうきに笑って首を振った。「ずっと同じですよ。うだつが上がらずです」

話を引き出すためにちよつと踏みこんでみたのだが、気まづさが残ってしまった。

「四、五年前に新店の計画があつて、その店長になんて話があつたんですが、立ち消えになっちゃいました。今では店長昇格どころか、リストラされるんじゃないかとヒヤヒヤしてますよ」

「そんな」小穂は笑い飛ばした。「長岡さんには「スポマート」を背負って立つてもらわないと」

「いや、冗談抜きでありえますからね」長岡は言う。「新店ができない上に、うちの店舗てんぼだけでも副店長が三人いますし、人がだぶつい

ちゃってるんですよ。噂によると、上のほうが親会社の関係でだいぶ入れ替わるらしくて、これからは積極路線でライバル店と対抗していくか、それともリストラで何店舗かつぶすことになるか、どちらかだなんて言われてますよ。どちらかだなんて言われても、出すとつぶすじゃ正反対なんだから、えらい違いなんですけどね」

「店ができるほうがいいですよねえ」

長岡は小穂の言葉に小さくうなずき、「でもまあ」と続けた。「噂に一喜一憂いっきいちゆうしても仕方ないですし、現場の人間は目の前の仕事をやるしかないですからね」

「そうですね」

長岡自身、明るい見通しは持っていないようで、相槌あいづちを打つ小穂の声も沈みがちになった。

「すみません」と、ジョギングシューズを見ていた客から声がかかり、長岡は返事をする。

「あ、お忙しいとこ、ありがとうございます」

小穂は短く礼を言い、その場から離れた。

東大和から都心に戻った小穂は、その足で青山の〔七村通商〕に向かった。電話で真中に連絡を取り、少し時間を作ってもらえないかと頼んだ。

「「スポマート」さんのことですが……」

真中に会うと小穂は早速、外部から「スポマート」の社長を探すという方針が立てられるに至った背景や経緯について、まだ聞いていないことがあるのではないかと、詰め寄るようにして訊いた。

経営状態がかなり悪いのでは……そう口にする、真中は開き直ったように、澄ました顔のまま、うなずいた。

「別に隠していたわけではありません。少し調べれば分かることですし、我々が手をつっこむこと自体、業績に問題を抱えていると言っているも同然のことですからね」

そちらの洞察力が欠けているのではないかとばかりの言い方に、小穂は歯噛みしたい思いに駆られた。

「もちろん、テコ入れが必要だからこそそのことだとは思っていません。問題は、その程度です。もし、新しい社長の取れる選択肢せんたくしがリストラシかないということなら、これはやはり特殊な案件だと言わざるをえません。キャンディデートも限定されてきます」

「景気が悪い会社だからということ、レベルの低いキャンディデートばかり持つてこられても困りますからね」

「そんなことはしません」小穂はムツとして言った。「経営課題に見合ったキャンディデートを用意したいから、そのへんを包み隠さず教えてほしいということですよ」

「タフな人を求めているとお願ひした通りです」真中は小さく肩をすくめて言った。「スポマート」の場合、リストラは不可避です。

店舗は差し当たって十店、従業員は七十人削る必要があります。例えば、東京にある三店舗のうち、ありあけ有明を除く二店舗はこの三年間、不採算続きです。最低でも一店は閉鎖し、残る一店も人数を絞っていかなければ好転しません。ほかの県にある店舗も同様です」

「改装費をかけて売り場を充実させ、ライバル店に対抗するという道は取れないんですか？」

「方針はすでに確定しています。甘い考えでは再建できません。もちろん、投資を増やす分野もありますが、それは主にネット通販に関するものなので、実店舗については、今お話しした通りになります」

厳しい。こんな経営方針が確定している会社に来てくれる経営者など、いるのだろうかと思え思う。

岩清水が言ったように、「七村通商」は自分たちの代わりに手を汚してくれる人間を探しているだけとも言える。

「世の中、ふんぞり返って威張っていれば高い給料がもらえるなんて仕事はありませんからね。ちゃんと探してもらえば、いい人材はいくらでも出てくるはずですよ」真中は言った。「無理だとおっしゃるなら、ほかに依頼するまでですが」

「無理だなんて言ってません。そういう事情だということが分かれば、それに相応ふさわしい人材を探してみせます」

小穂は半ば意地になって、そう応えた。

「この前は悪かったね」

夜、畔田が「クラブ紗也加」に顔を出した。

小穂が彼の席に付くやいなや、「スポマート」のキャンディデイトを辞退した件について、申し訳なさそうに口にした。

「フルーツでも頼もうか」

詫びのつもりなのか、彼はスタッフにフルーツ盛りを注文した。

「私のほうこそ、申し訳なかつたです」小穂は言った。「向こうの事情や意図を十分に把握しないままに、話を持って行ってしまった」

「やっぱり、リストラありきの話だったの？」

畔田はキャンディデイトではなくなってしまったので、クライアントの事情は安易に明かせないが、小穂は微苦笑でもって返事に代えた。

「七村」はそういうやり方が多いんだよ」畔田は言う。「ジーンズメーカーの「ファイファイフォー」も繊維メーカーの「近畿紡きんきぼう」も、業績不振で資本を入れた会社には、徹底的にリストラをやらせてる。もちろん、その手法を否定するつもりはないけど、選択肢が一つし

かない仕事なら、何も自分がやらなくてもつていう気持ちにはなっ
ちゃうからね」

「そうですね」小穂はうなずいた。「外部から社長を探す以上、課
題がないわけじゃないとは思ってましたけど、それよりは、優秀な
人に子会社を引っ張ってもらいたっていう、親心みたいな思いが
強い依頼なんだろうって勝手に受け取ってました。名の通った会社
だし、社長だし、悪い話じゃないと思って紹介したんですが……考
えが安易でした」

「まあまあ、そんなへこむことでもないよ」畔田は笑って、慰め
に
回った。

「はい……これに懲りず、いい話があったら、また聞いてください」
「もちろん」

畔田はさっぱりした口調で請け合い、小穂の屈託を吹き飛ばして
くれた。

「でも、逆に言うと、その話をまとめるのは、かなり難しいよね」
彼は水割りのグラスを片手に少し考えこんでから、改めてそんな
ふうに言った。

「そうなんですよ」小穂は口を尖らせて言う。「後ろ向きの仕事を
やらされるのが分かってるのに、手を挙げてくれる人がいるのかっ
て思っちゃいます」

「ただ、リストラなんていうのは、外部から来た人間のほうが、思い切つてできるのは確かなんだよね。中の人間は、どうしても情が入るから」

「それはあるでしょうけど……」

ただ、何の情もなくリストラを推し進められる経営者というのも嫌だなと思う。長岡のように、現場で働いている人間の顔を知っているだけに、なおさらそう思うのだ。

「まあ、経営者の中には『リストラ屋』なんて呼ばれる人たちもいるから、そういう人に目をつけるのも一つの道かもね」畔田が言う。

「リストラ屋……？」

「あるいは『コストカッター』とかね」

「ああ……」

「そういう経営ソリューションで結果を出して、いい意味でもそうでない意味でもそう呼ばれる人たちがいるわけだよ」

「揶揄で言われたりもしますよね」

「うん……でも、簡単な仕事でないのは確かだから、そう呼ばれるのはある種の名誉だと受け取っていいと思うけどね」

「なるほど」

そう呼ばれる人はどこにいるのだろうか……小穂は当ても分からなのまま、探してみるかという気になっていた。

週明け、井納いのうにリストラ屋やコストカッターと呼ばれている人を探してくれとメールし、小穂自身もキャンディデート探しを仕切り直すことにした。

「コストカッター」はともかく、「リストラ屋」などという呼び名は巷間こうかん口にされるものであって、適当なビジネス誌を当たっても見つかるものではない。仕方がないので、リーマンショック後の不景気時にリストラを余儀なくされた会社の経営者などを、各種媒体の過去の記事から探すことにした。

そうやって一人二人と、何とかリストに入れられるキャンディデートを見つける日々を送って十日ほど、また木曜がやってきて、小穂は「クラブ紗也加」に出勤した。

その日、九時半をすぎるまでは、いつもの和なごやかな雰囲気の中、それぞれの席で楽しい会話の花が咲いていた。いくぶん客入りは少なかったので、自然、一人一人の客をホステスたちが取り囲むような光景になり、来店客は上機嫌でグラスを傾けていた。

九時半をすぎ、一組の客の帰りを見送って間もなく、二人連れの客が顔を覗かせた。

「あら……」

近くにいた紗也加の声に釣られて、小穂はその客たちに目を向け、

そしてぎよっとした。

「丸の内コンフィデンシャル」の戸ヶ里だった。

「政樹さん……ご無沙汰ですね」

紗也加も戸惑いを隠し切れない様子で、そんな声をかけている。

「ご無沙汰してます。ちょっと飲ませてもらうかと思いましたが」

戸ヶ里はほとんど無表情でそう口を開き、案内待ちを決めこむように突っ立っている。小穂と目が合うと、一瞬、おやというように眉を動かしたが、それだけだった。その後ろにいるのは、戸ヶ里と同年代か少しだけ上に見える、がっちりした体格の男だ。スーツの着こなしに隙はなく、どちらも、飲み歩きが好きなタイプには見えない。

「ご案内します」

黒服のスタッフが彼らをフロアに案内する。

「げっ！」

客席で常連客相手に笑い声を響かせていた花緒里が、戸ヶ里と顔を合わせるなり、泡を食ったように狼狽ろうばいしている。

「何？ 何しに来たの？」

彼女は戸ヶ里たちをよけるように身を屈かがめて客席を離れ、紗也加のところまで駆け寄ってきて、ひそひそ声でそんなことを訊いた。

「私こそ訊きたいわよ」

紗也加はそう答えながら、スタッフに案内されて奥の客席に陣取った彼らの様子を眺めている。

「戸ヶ里様、花緒里ママとかのこさん、ご指名でございます」

「え、何で私!？」今度は小穂も驚いた。

「あ、そうだ、中山なかやまさんが近くの店で飲んでるっていうから、私ちよつと、迎えに行ってくる」花緒里が中抜けするようなことを言い出した。

「あの席、どうするんですか?」

「かのこちゃん、お願い」

彼女はそう言つて、そそくさと更衣室こいうしつに上着を取りに行つてしまった。

「そんなに嫌なんですかね?」

彼女の慌てぶりを見てみると、引き留めることもできず、ただ、そんな疑問を口にしたくなるだけだ。

「そりゃ、元妻に接客させようとする男が相手なんだから、嫌に決まってるでしょ」

紗也加に言われ、そう考えると確かにそうかもしれないと思った。二人がどんないきさつで別れたのかは知らないが、わざわざ元妻がいる店に何の他意もない顔をしてやってきて、その当人を席に付けようとする時点で、並みの神経ではないと言わざるをえない。花緒

里も通常の接客など、できはしないだろう。

カーディガンを羽織って店を出てしまった花緒里を尻目に、小穂は、紗也加に呼ばれたほかのホステスたちと一緒に、戸ヶ里の席に向かった。

「ご無沙汰してます。こんなところでお会いするとは」

小穂はへらへらと愛想笑いを浮かべながら、戸ヶ里と連れれの男の間に収まった。指名された以上、ここに座るしかないが、居心地はよくない。

「花緒里はどこに行ったんだ？」

「あ、ええと……」

戸ヶ里に尋ねられ、口ごもっていると、紗也加がウイスキーボトルを持って、席に来た。

「ごめんなさい、花緒里ちゃんはやっと、お客さんを迎えに行く約束をして」ボトルを開けながら、紗也加は取り繕うように言った。「ほかの店で飲んできるとこみたいだから、戻ってくるのはちょっと時間かかるかもね」

「そう……」

戸ヶ里はそれで納得したらしく、淡々とした相槌を打った。感情の読みにくい男だ。

一時は親類付き合いをしていたはずの紗也加も戸ヶ里は苦手な相

手なのか、下ろしたてのボトルで乾杯すると、さっさと席を外してしまった。

「花緒里が「ガルウイング」の社長と仲よくやっってるって聞いたが、本当か？」

戸ヶ里が小穂の耳もとに顔を寄せ、小声で尋ねてきた。

「え……いや」その陰にこもった声音に、小穂は思わず首をすくめそうになった。「どうなんでしょう。交友関係は広い人なんで、知り合いかもしれません」

「ここに飲みに来てるんだらう？」

仲よくやってるとは、男女の関係と疑っているということなのか。花緒里と岩清水がプライベートでどういう関係かまでは小穂も知らないが、店ではもちろん、ほかの得意客と同じように接しているだけだ。また、ヘッドハンターとしては、「ガルウイング」の財務担当役員や広報部長を花緒里が手当てしたと聞いている。

おそらくその勤練りは当たっていないと言いたい気持ちはあるが、戸ヶ里と岩清水がどうつながっているかも分からないので、岩清水がこの店に通っていること自体、認めるわけにはいかない。

「さあ……私もここでバイトするようになって、まだ日が浅いんで小穂はそう言ってごまかしておいた。

「ガルウイング」の社長は妻子がいる身だ。変な噂を立てられると、

私まで迷惑する。君のほうからあいつに一言言っておいてくれ」

別れた妻に未練があつて、そんな勘繰りを抱いだいているというわけでもないのか……よく分からない。

小穂は愛想笑いを浮かべたまま曖昧あいまいにうなずき、「こちらは、同じファームの方ですか？」と、連れの男をちらりと見やって、話を変えた。

「いや、違う。HBS時代の私の友人だよ」

不意に大きくなった戸ケ里の声は、相変わらず感情がこもっていないものながら、明らかに滑らかになっていて、その分、小穂には薄気味悪く感じられた。

「文具メーカー〔モリヨシ〕の社長をやっている山室くんだ。山室くん、彼女に名刺を渡してやってくれないか」

戸ケ里が何やら気を回すように言い、彼の反対隣りに座っていた山室が仕方なさそうに、名刺入れから抜いた一枚を小穂に渡した。

「ありがとうございます」

山室久志。文具メーカーの〔モリヨシ〕は小穂も名前を知っている程度だ。

「山室くん、彼女は私の同業者でね、まだ若いけれど優秀なヘッドハンターだ。普段は競い合ってるが、お互い、様々な企業の発展に貢献する仕事をしているという意味では、認め合ってるし、心の中

で励まし合ってる関係だとも言える。だからこそ、こうやって情報交換をしたりもできる」

何だこれ、気持ち悪い……小穂は自分の両肩を抱えなくなった。

戸ケ里とは「ゼロエトワール」のときに競合し、二度ほど顔を合わせたことがあるだけだ。認め合っているとか励まし合っているなどと言えるほどの交流はない。

「鹿子さん、君の名刺も彼に渡してやってくれ」

「ごめんなさい。ママとの約束で、ここでは、お店の名刺しか渡せないんですよ」

小穂はそう言っ、店の名刺に名前を書いたものをポーチから出した。

「そんなの渡したって、彼は家に帰る途中で捨ててしまうよ。客の私がいいと言ってるんだから、ファームの名刺を渡しておきなさい」

「あ……はい」

そこまで言われれば仕方ないと、小穂はファームの名刺を山室に渡した。しかし、その山室は、大して小穂に興味がないような様子であり、名刺も一瞥ひとくちしただけで内ポケットに仕舞ってしまった。

「彼は私が「モリヨシ」に連れてきたんだが、赤字続きで苦しかった会社を見事に立て直してね、「モリヨシ」の会長からも、優秀な人間を連れてきてくれたって喜ばれたんだよ」

「へえ、そんなに見事な結果を出してもらえると、ヘッドハンターみょうり冥利に尽きますね」

小穂はそんなふうに話を合わせながらも、心の中には違和感しかなかった。山室は戸ケ里の友人であり、キャンディデートでもあるということだ。そんな相手をよそのヘッドハンターに引き合わせ、名刺交換まで勧めている。いったい、何がしたいのか分からない。

「私のことは別にいいよ。せっかくだから、彼の経営哲学なんか訊いてみるといい」戸ケ里がそう促す。

「あ……じゃあ」小穂は仕方なく、山室に話を振った。「山室さんは、会社を経営される中で、何を一番大事にしてらっしゃるんですか？」

山室は長い沈黙で場の雰囲気をはとしきり重くしてから、ようやく口を開いた。

「それは、経営する中で、何を一番大事にすべきか、見極める作業ですね」

「な、なるほど……」

ぜんもんじょう 禅問答のような答えに、小穂は苦しい相槌を打った。

「何それ、気持ち悪い」

戸ケ里たちが帰ったあと、ようやく店に戻ってきた花緒里は、小穂から話を聞くと、実際に自分の両肩を抱えて震えてみせた。

「別に、岩清水さんとだけ仲よくしてるわけでもないし、だいたい、私が誰かと仲よくなることに、どうしてあの人がいちいち迷惑しなきゃいけないわけ？」

「そんなこと知りませんよ」小穂は口を尖らせて言った。「とにかくもう、向こうも全然、楽しみに来たって感じじゃないし、今までで一番きつい席でしたよ」

ストレスが溜まった分を花緒里にぶつけてやった。

「それだけ、言いに来たってこと？」

「分かんないです」小穂は首を振った。「連れの人、戸ヶ里さんの友達で、キャンディデートでもあるんですよ。そんな人をわざわざ同業の私に紹介して、何考えてるのか、全然分かんないんです」

「友達って誰？」

「山室さんっていう、「モリヨシ」の社長さんです」

「山室さん……ああ、HBS時代の友達だ。昔は私に会わせようとしたしなかったくせに」

一匹狼のヘッドハンター同士であるだけに、たとえ夫婦であっても、自分の手札となる人間には会わせなかったらしい。

「せっかく紹介してくれたんなら、その人、取っちゃいな」花緒里が言う。

「えー」

もちろん、戸ヶ里とは何の義理もないわけだから、そうしたところで問題はないのだが。

「取っちゃえ、取っちゃえ」

花緒里はそそのかすように言った。

いつもは仲のいい客のアフターに付き合っている花緒里だが、この日は約束がなかったらしく、送りの車の小穂の隣に乗りこんできた。助手席には美南みなみが座っている。

店が閉まる頃には、いろんな客の相伴しよばんにあずかって、それなりに酔っ払っていることが多いのだが、この日の小穂は戸ヶ里に調子を狂わされたようで、酔いよりも疲労感のほうが強かった。早く眠りにつきたい気分だった。

隣では、花緒里がスマホをいじっている。スケジュールの整理か、客へのお礼メールか……漠然とそんなことを思っていると、その液晶画面に子どもの顔が映し出されているのが目に入り、小穂は一気に眠気が冷めた気分になった。

「それ、花緒里さんの？」

「そうだけど」花緒里が言う。

五、六歳くらいの女の子である。ご飯を食べているところの写真だ。

「いい子にしてるよって、お母さんが送ってくれるのよ」

「てか、お子さん、いたんですか？」

「何を今さら」

「今さらって、花緒里さんも私の名前、間違えてたじゃないですか」

小穂は言ってやった。「所よさんも教えてくれないし」

「それは、プライベートのことですから」

助手席の美南がぼそりと言った。

「うわ、うちの秘書、優秀……」

どうやら花緒里には、別れた戸ヶ里との間に、今年六歳になる一人娘がいるらしかった。花緒里母娘おやこは花緒里の母親と一緒に生活していて、花緒里が仕事で家を空けているときは、母親が娘の面倒を見てくれているのだ。

「そうなんだ……」

子どもがいるのに別れてしまったのか……小穂は何とも複雑な気持ちになった。

「何で別れたのかって思ってるの？」

花緒里に横目でちらりと見られ、そう言われた。

「そこまで立ち入るつもりはありませんけど」小穂は言う。「何ですか？」

「まあ、私の見る目がなかったんだろうね」花緒里は言った。「底が

見えなくて、ちょっと謎めいてるくらいがいいとか、思ってたのかも。でも、身ごもったときに分かったのよ。子育てに専念するため仕事を辞めてもいいんじゃないかって彼に言われて、私もその気になればいつでも復帰できるって自信はあったから、四、五年は専念しようかと思つて、ボスに辞めるって言ったの」

当時は二人とも「ルイスラザフォード」に勤めていたはずだから、その上司に辞職を申し出たということなのだろう。

「ボスは、何も辞めることはないって惜しんでくれたんだけど、私は決めちゃってたから、はいはいって受け流しながら残務整理してたのよ。そしたら、そのうち、変なこと言い始めるわけ。かつて、君へのライバル意識をむき出しにしてた戸ヶ里が君と結婚することになって、俺は驚いたんだ。しかし思うに、あいつは、自分のライバルである君をこの業界から追い払いたいがために、結婚したんじゃないかって。

さすがに、そんなこと考えて結婚する人間がいるとは思えないし、これから幸せな家庭を築こうとしてる人間に言うことじゃないなと思つて呆れたの^{あき}。それで、いい加減にしてくださいって言って、残務整理続けて、ふと、ファームのデータベースを開いたのよ。そして、私のキャンディデイトの何人かのフラグが戸ヶ里に変わってるじゃない。あれ、おかしいなと思つて。担当する案件はともかく、

キャンディデートなんて、誰かに引き継いでもらうものじゃないからね。しかも、上から何人かだけ。入力間違いなのかバグなのか分かんなくて、何回かデータ更新してみたのよ。そしたら更新するたび、ほかのキャンディデートも上から順番に、どんどん戸ケ里のフラグへと置き換わっていくのよ」

「きゃあ、怖い！ 怖い！」

黙々とデータベースに手を入れる戸ケ里と、その画面をぞっとしながら見ている花緒里の光景を想像し、小穂は美南と二人で悲鳴を上げた。

「結局さあ、ヘッドハンティングの仕事してるからって、自分が誰の人間性でも見極められるなんてつもりになってちゃ駄目ってことよ」花緒里がしみじみと言う。「鹿子ちゃんも、それを自分で認めたところから始まるからね」

「べ、勉強になります」

小穂は苦笑いを引きつらせて、そう返事をした。

5

「じゃあ、私はタクシー拾って帰るよ」

地下鉄銀座駅の入口で、戸ケ里が言った。

「そうか」

山室は、久しぶりに会おうと連絡を寄越し、なぜか銀座の高級クラブに連れてきた男を見返した。

「たまにはこういう夜もいいだろう。また会おう」戸ケ里は用意していたような微笑を顔に貼りつけて言った。

「どういうつもりだ？」

山室は返事をする代わりに、そう尋ねる。

戸ケ里は小さく首を傾けた。

「ほかのヘッドハンターと引き合わせたりして」

「何言ってるんだ」戸ケ里は言う。「別れた妻のいる店だから、何かと融通が利くと思っただけで、彼女の後輩がバイトしてた。知ってる子だから、君に紹介した。それだけのことだ」

「先日も、矢来とかいうヘッドハンターが俺にアプローチしてきた」

「矢来？」戸ケ里はわざとらしいほどに、一生懸命記憶をたどるような表情を作ってみせた。「さあ……知らんな」

「俺がそういうヘッドハンターの話に興味を持ったら、どうする？」山室はそう訊いてみる。

「それは君の自由だ」戸ケ里は言った。「私ごとやかく言うことじゃない」

「俺はまだしばらく、今の会社を離れるつもりはない」

山室がそう言うと、戸ケ里は数秒の沈黙を挿^{はさ}んでから、口を開いた。

「それも君の自由だと言いたところだが、そうはならないこともある」

秋の冷やかな夜風が、山室の首筋を抜けていった。

6

山室久志。

井納から上がってきた六人のキャンディデイトの中からその名前を見つけた小穂は、思わず、「へえ」と声を上げていた。

井納には、「リストラ屋」とか「コストカッター」と呼ばれている人間を探してほしいと頼んであった。

どうやら山室には、そうした呼び名が付いているらしい。

井納がまとめたプロフィールによれば、山室は横浜国立大学を卒業したあと、大手転職情報会社「しよくつう職通」に数年勤め、独立。元同僚たちと登録型転職マッチング会社「ビズセレクトション」を起こし、副社長を務めた。その後、同社を退社して、HBSに留学しMBAを取得。紳士靴販売チェーン「メンズシューズKUNO」常務を経て、オーディオ機器メーカー「ブルースター」やカラオケ店チェー

ン「みんなの十八番」の社長などを歴任。現在、文具メーカー「モリヨシ」社長……とある。

文具業界紙の記事も添付てんぷされている。「リストラ請負人」に赤字脱却を託すモリヨシ」という見出しだ。常務や社長として経営に携わった過去の会社では、いずれもリストラ計画の陣頭指揮をとり、それが劇的な効果を生んで、業績を改善させたのだという。

最初の「メンズシューズKUNO」では、世界的な不況も重なり、従業員の削減も全体の二割に達するなど、五年がかりの難業となったが、「ブルースター」や「みんなの十八番」では、それぞれ二年足らずで成果を出し、次の会社へと引き抜かれていくなどしたため、一部の関係者からは「リストラ請負人」と呼ばれるようになったということだ。

山室がかつて勤めていた「職通」は、転職業界の雄ゆうである。多彩な人材を輩出して、サーチファームと競合するような、エグゼクティブ相手の転職ビジネスを手がけている子会社も擁ようしている。

つまり山室は、日本の諸々の産業を一つの会社として捉とらえようと、人事畑でキャリアを積んできた人間だと言っている。

そんな人間だからこそ、人的コストが業績に与える影響も十分すぎるほど理解でき、また、どの部門のどの人員を削れば、業務へのマイナスの影響を最小限に抑えた上で経営のスリム化に寄与するか

ということも、考えることができたのではないだろうか。

山室に関する資料のほか、彼が経営に携わった会社の業績の推移などもチェックした小穂は、「スポマート」のキャンディデートには彼のような経営者がいいのではないだろうかと思うようになっていた。

「今度はハーバードのMBAですか」

八人のキャンディデートを記したリストから顔を上げた真中は、皮肉めいた薄笑いを口もとに覗かせて言った。

彼が目を留めたのはやはり、リストの筆頭に挙げている山室のようだった。

「前よりスペックが上がってるじゃないですか……いや、ビジネススクールはスタンフォードのほうが上でしたっけ」

「そのへんはもう、どちらが上とかというようなレベルの違いはないと思います……」

小穂の返事に真中は小さくうなづく。

「私も忙しさにかまけて果たせなかったんですが、こういう名門スクールに留学してMBAを取ろうかと思ったこともあったんですよ。だから、こういうキャリアを見ると、つつい興味を持ってしまう。前回のこともあるし、鹿子さんも、こういう人材はあえて外してく

るかと思ってきました。というより、普通はそうするべきです。それなのに、リストの筆頭にまた載せてきた。でも、打診したところで、またあっさり断られるんじゃないですか？」

「前回のキャンディデイトとの違いは、この方が、リストラを主軸とした経営手法で、いくつかの会社を立て直した実績があるということですよ。断られるかどうかは何とも言えませんが、オフアースする段になったら、引き受けていただけるよう努力はいたします」

「ふむ……」

「とりあえず、一度、打診の前段階として感触を探ったり、あるいはリファレンスを取ったりして、検討材料を増やしてみましようか」

小穂の提案を、真中は「そうですね」と了承した。

山室には、「クラブ紗也加」に飲みに来た翌日、ホステスとしてのお礼メールを送っている。さらには、キャンディデイトとして「スポーツマーケット」のリストに載せることを決めたときに、サーチの仕事において何らかの形で関わられたら嬉しいというような、取っかかりの挨拶状のようなものを、手書きでしたためて送っている。アプローチのための下準備は済んでいる。

店で会ったときは、戸ケ里に引っ張られて来ただけで、進んで飲みに来たわけではないというような様子だったが、そこは真中のよ

うに、仕事の話になれば、それなりの反応をしてくれるだろうと期待するしかない。

小穂はオフィスに戻ると、早速山室に電話してみた。

〈もしもし〉

秘書と思われる女性に取り次いでもらい、山室が出た。

「もしもし、山室さんですか。鹿子です。この間はありがとうございます
いました」

〈いえ〉山室は少し迷惑そうな声で応じた。〈わざわざ電話していた
だかなくても〉

「ごめんなさい、お忙しいときに」小穂は感情をこめて謝り、話を続ける。「今日はお店のことじゃなくて、本業のほうでちよっとお電話させていただいたんですが、少しだけ、お時間ありませんか？」

〈何ですか？〉

興味があるというよりは、早く話を片づけたいというような反応だった。

「実は私、ある会社の社長を探す案件を抱えておりまして、ちなみになんですが、山室さんは今現在でも昔の話でもけっこうなんです
が、何かスポーツはおやりになられていますか？」

〈……柔道なら、中高生の部活でやりましたが〉

「柔道ですか！なるほど、山室さん、柔道着似合いそうですね」

ね」小穂は言う。「それはよかったです!」

〈柔道が何か?〉

「いえ、柔道というか、具体的な社名はまだ明かせないんですが、その会社が各種スポーツに関係するビジネスを手がけているもので」そう答えてから、また訊いてみる。「もう一つ、うかがってもいいですか? 山室さん、経営のプロとして、これまで何社かの企業を渡り歩いておられるようですが、今現在は、次の働き場所に目を向けるような心境にあるのかなということですけど」

〈まだ今の会社に移ってきて二年足らずですし、やり残していることがあります。次に目を向ける状況ではありません〉

「以前は二年度で業績をV字回復させて移られた会社もありますよね。今の会社も山室さんの手腕によって、収支は大幅に改善して黒字化の目処めどもついた状態のようですが……?」

〈それは数字の上でのことであって、やるべきことはまだ残っています。リストラというのは、そんなに簡単に目処がつくものではありません〉

「もちろん、リストラ自体、大仕事だと思えますし、その効果が継続していくものかどうかを見届けなければならないという思いがあるのは分かります」小穂は山室の言葉をそう受け止めてから続けた。「でも、どうでしょう。ほかにも経営の危機ひんに瀕ひんしている会社があ

って、山室さんの力を必要としているとすると、ちょっと興味が湧いたりしませんかね？」

「……今の会社のことと頭がいっぱいですので、そう言われても、興味など湧くものではありませんね」

ほんのわずか、考えるような間があった気もしたが、答えはにべもないものだった。

「分かりました」今日のところは深追いせず、いったん引き退がったほうがいいなと思った。「最後にもう一つだけ、ちなみになんですが、山室さん、これまでの転職は、どれも戸ヶ里さんが動かされてのものですか？」

「へえ、今の会社だけです」

「そうすると、こういう話は、戸ヶ里さん絡みでなければ聞かないというわけではないんですね？」

「それはまったく、関係ありません」山室は言下げんかに言い切った。

小穂は礼を言い、また連絡させてもらうかもしれないと告げて、電話を切った。

感触からすると、難しいと言わざるをえない。

しかし、ヘッドハンティングの仕事を始めてから五カ月近くが経ち、ほかの案件も含めてそれなりに引き抜き交渉を経験してきた感覚で言うなら、初めのうちのキャンディイトの反応というのは、

だいたい、こんなものである。

山室はリストラの手腕で評価され、また、自身でもそこに売りがあることを理解しているプロ経営者だと言っている。でなければ、経営危機の会社ばかりを渡り歩いたりはいらない。

「スポマート」はそんな彼の手腕が存分に発揮できる舞台である。クライアント側の受けも上々だ。そう考えると、このマッチングはベストだと考えていいだろう。

交渉の鍵となるのは何か？

いろいろ考えてみて、小穂は、時期的なものではないだろうかと思った。

彼はまだ、「モリヨシ」においてやり残していることがあると言っている。

これにいつ区切りがつけられるのかは、訊いてみないと分からないが、その時期と、「スポマート」の社長交代がいつまで待てるかというリミットの兼ね合い次第で、話がまとまる芽が出てくるかもしれない。

その時期的な問題はおいおい両者から確認を取ることとして、とりあえずは山室のリファレンスを進めることにしようと、小穂は決めた。

そこからまた、交渉の突破口とつばこうが見つかることも期待できる。

「花緒里さん、戸ヶ里さんのHBSの留学仲間って、山室さん以外に知りませんか？」

山室の人脈を手繰るため、小穂はオフィスでつかまえた花緒里に訊いてみた。

「知るわけじゃないじゃない」花緒里は戸ヶ里の名前を出すと、露骨に嫌な顔をする。「結婚式だって誰も呼ばなかったし、私、あの人には友達いないのかと思ってたんだから」

「そ、そうですか……」

こちらのルートは難しそうだ。

「ちなみに、「ビズセレクトション」って、花緒里さん、知ってます？」

「うーん、聞いたことがあるような、ないような」

「もともとは「職通」にいた人たちが独立して起こした転職情報会社で、山室さんが副社長をやってたらしいんですよ。今は「職通」の傘下さんかに入ってるみたいなんですけど」

「「職通」ならいくらでも知り合いがいるから、誰かに訊けば分かると思うけど」

山室のリファレンスを取りたいので、二、三、当たってみてもらえないかと頼んでみると、花緒里は「いいよー」と快諾かいだくしてくれた。

ほかにも小穂の高校・大学時代の同級生や三田会みたかいで知り合った同

窓生を中心に、現状の人脈をフルに使って、紳士靴業界、オーディオ業界、カラオケ業界、文具業界に勤める知り合いがいたら紹介してほしいと、メールなどで触れ回った。

それから何日か経つうちに、各所から反応が集まってきた。

紳士靴業界では、同級生の夫が英国ブランドの高級紳士靴の輸入代理店に勤めているらしく、業界の動向にもそれなりに詳しいというので、電話で話を聞かせてもらった。

〔KUNO〕さんね、うちとは付き合いませんけど、就活のときの靴なんかはあそこで買ったりしてたんで、もちろん知ってますよ。昔はファッションブランドの〔スタイナー〕とライセンス契約を結んで、その靴を作って売ってたんで、割と儲か^もってたんです。でも、〔スタイナー〕本体が傾いて、中国資本に買われて、ライセンス契約も打ち切りになったんで、一気に苦しくなっちゃったんですよ。それから四、五年でどんどん店がつぶれてって、こりゃ、会社自体も危ないんじゃないかって思ってたんですけど、何とか息を吹き返しましたね。〔スタイナー〕の代わりにライセンスを取った〔フィッツロイ〕がそこそこ根づいたのと、若者向けの〔タカヤス・ウラハラ〕が当たったのが幸いでしたかね。もちろん、不採算店を徹底的に切って、身が軽くなったっていうのも大きいと思いますよ。やっぱり、外回りの営業マンなんかは、高級靴を靴擦^{くっ}れ我慢して履き慣

らすなんてこと、してられませんから。一年で履きつぶれてもいいから、それなりのデザインで、軽くて、一万円でお釣りが来る靴を買いますよ。今は中国にも出店して、また店を増やしてるみたいですよ」

話を聞くと、徹底したリストラ策が功を奏した上に、新しい経営の柱も立ったのが、業績回復の要因となつたらしい。ただ、このときの山室は専務であり、次の会社にはリストラの腕を買われて引き抜かれているので、功績もリストラに関するものが大きいのだろう。「ブルースター」時代については、小穂が「フオーン」を辞めるときにも相談した女性雑誌の編集者から音楽評論家を経由し、オーディオショップのオーナーを通して、「ブルースター」の営業課長に直接話を聞くことができた。

「いやあ、あの二年間はうちの暗黒時代ですから、あんまり思い出したくないですね」営業課長は苦笑気味にそう話し始めた。「それまで百二十人いた社員が一気に百人割りましたからね。あの社長、オーディオはまったくの門外漢もんがいかんだったんですよ。うちに来てしばらくは、アンプの仕組みとかスピーカーの音の違いとか、技術屋にいから説明受けてたんですから。それがばっさばっさと人を切り始めたんで、社内は阿鼻叫喚あびきょうかんですよ。まあ、オーディオがマニアだけのものなんて時代になって、経営的に厳しいって声は聞いてましたけど、

みんな自分の仕事に誇りと愛情を持ってましたから、早期退職を募っても五人しか応募がなかったんですね。それで社長自ら出てきて、各部、各課の責任者と膝突き合わせて、朝から晩まで余剰人員の検討会議ですよ。この業務にこれだけの人員は必要なのか、そもそもこの業務は必要なのかなんてことを、重箱の隅をつつくように追及されるわけです。私もそのときは課長補佐として出席してましたけど、いやあ、あれはきつかったですね。

当時の営業課長は親分肌の人でしたからね、部下でリストラ対象になる人間を出せなんて言われたところで、ふざけんなって態度ですよ。そんなの一人もいるわけがないってね。

そしたら、部下の考課を冷静に下せないのは、管理職としての能力不足に当たるということで、その営業課長が肩たたきの標的になっちゃったんですよ。それもまた社長が直々に膝を突き合わせて、君の能力を冷静に分析すると、この部署のこの業務を任せるしかないと思ってるなんてことを言い渡すんです。今までの仕事というか、自分の存在価値を否定されるわけです。人間、そんな立場に置かれたら、しゅんとするか、かっとなるかどちらかですよ。もうどちらもないから言っちゃいますけど、その営業課長は降参して配置転換を呑んだかと思ったら、傘持って社長室に引き返していきましてね。よく警察沙汰にならなかったと思いますよ。社長は助

骨折こっれたらしいですよ。でも、二日後には何もなかったように会社に出てきて、また淡々と検討会議開いてね、この人、恐ろしいなと思います。営業課長のほうは、もう辞めるしかありませんよ。そこからはもう、ほかの部署もみんなびびっちゃって、社長のワンサイドゲームです。

ただ、山室社長を呼んだ会長が死んで、奥さんが新しい会長に就いたのを機に、潮目が変わりましてね。あまりの容赦あらいようじのない荒療治を見聞きして、このままじゃ駄目だと思ったみたいです。今度は社長が、あっさり追い出されちゃいました。

まあ、今は、曲がりなりにも利益を出せてますから、あのリストラも確かに効果があったんでしょう。でも、あの二年間は、生きた心地はしなかったですね」

一口にリストラと言っても、現場は相当な修羅場しゅらばなのだ……小穂はそんな感想を率直に持った。山室はそこをくぐり抜け、周囲からは血も涙もないくらいの人間として恐れられていたようだ。

結果は出したものの、終しまいには、オーナー側も山室を持って余して、切るしかなかった。そのいきさつを含めて、人間性には少なからず、引っかけかりを覚える。「スポマート」のために、文句なく推せる人材かどうか……見極めが必要かもしれない。

あるいは、それくらい徹底的な経営者のほうが、真中などは歓迎

するのかもしれないが……。

その後、何日かして、次の聞き取り相手が見つかった。

小穂の大学時代の同級生が、銀座の大きな文具店で働いている。その彼女が文具業界の三田会で知り合った中に、「モリヨシ」の社員がいるということだった。

〈まだ二十五、六なんだけどね、会長の孫なのよ〉

営業部の次長を務めているという。そんな男なら、まだ若くても、山室の話を聞けるだろうと思ひ、小穂は橋渡しを頼んだ。山室が籍を置いている会社の人間なので、あからさまにヘッドハンティングのリファレンスだとは知らせず、人材コンサルタントとして、リストラ経営のケーススタディをしていると伝えてもらった。

直接会って話が聞けるということだったので、小穂は約束の日の夕方、押上の「モリヨシ」本社に足を運んだ。

出迎えてくれた森川航わたるは、まだ学生と見間違われてもおかしくない風貌ながら、さすが会長の孫というべきか、立ち居振る舞いは堂々としていた。通路の中央をずいずいと歩いていき、小穂を無人の会議室に通してくれた。

「こちらの山室社長が、"リストラ請負人"として有名でいらっしやるということをお聞きしまして、その手腕は客観的に見るとどう

なのかというあたりを、お話しいただけると嬉しいんですが」

「何でも訊いてください」と鷹揚おうように構えていた森川は、小穂が切り出した言葉を聞いて、冷ややかな薄笑いを浮かべた。

「『リストラ請負人』とはよく言ったものですよ。人を切ること、不採算部門をつぶすことにかけては、あの人の右に出る者はいないんじゃないかな。たぶん、そういう仕事が楽しいんでしょうね。そうじゃないと、ああはできないですもん」

「そんなに徹底してやられるんですね」

リストラを楽しんでやるのかと、小穂は鼻白はなしろむ思いだった。

「やり方も巧妙ですよ。あの人はまず、有能な人間に目をつけるんです。役職付きで周りも有能だと認めているけれど、当座の仕事と噛み合っかってなくて、いまいち結果が出ていないみたいなのね。やっぱり、赤字かきが嵩かさんでる事業部門は、そんなふうに空回りしてる人材がいるものなんです。そういう人間に厳しい査定を突きつけて心を折る。そういう評価を甘んじて受け入れ、理不尽な配置転換を呑むよりは、外に出て心機一転勝負し直したほうがましだと思わせる。目をつけられたら、逃げようがないわけですよ。」

有能な人間を一人追い落としたら、あとはがたがたと崩れていきます。あの人で駄目なら、俺なんか駄目に決まってるって思わされちゃうんですよ。そのへんの手順は慣れたもんですね。たぶん、そ

れまでの会社で身につけてきたんじゃないかな」

「業績はそれで改善したんですか？」

「リストラっていうのは、退職金に上乗せしたり、不採算事業を畳んだりするのに、それなりのお金がかかるんですよ。だから、今期の全体はまだ赤字なんです。本業はもう黒転してます。そりゃあ、あれだけやればねって話ですよ。何せ百人以上、切りましたからね」

「えーっ？」

「切る」という言葉も悪いが、百人余りの怨念おんねんがこのオフィスにもっているような気がして、小穂は背筋に寒気を覚えた。

「特に中間管理職ですよ。うちは営業一部二部で次長、課長が十八人いたんですけど、次長が僕一人、課長は四人になりましたからね」

「スポマート」で久しぶりに会った長岡の顔を思い出し、何とも言えない気分になる。あそこも副店長が何人もだぶついていると言っていた。もし山室が「スポマート」のリストラに着手したなら、彼などは危ないのではないかと思う。

「恐ろしいのは、リストラはまだ終わってないなんて、本人が言うてるらしいですよ」

「まだ不十分だと……？」

「本心はどうか分かりません。社内に緊張感を持たせる意味で言うてるだけかもしれませんが、案外、本気かもしれませんよ。楽しんで

でやっつてるとしたら、本気でしょね」

「でも、そしたら、どこで区切りをつけるんでしょう……？」

「いやあ、さすがにこれ以上は無理ですよ。あの社長は、会長がヘツドハンターを使って呼んだんですけど、その会長も、これ以上は好きにさせられないって感じになってますからね」

自分にはその会長がバックに付いているとばかりに、森川の口調には、先が見通せているような余裕があった。

山室はまだやり残している仕事があると言っているが、時間はそれほどないのかもしれない……小穂は「モリヨシ」を出て、帰りを歩きながら思う。非情なまでに徹底したリストラ策の遂行ぶりに、彼を招聘したオーナーサイドも嫌気が差し、最後は、切り捨てた余剰人員同様に追い出すことになる……「ブルースター」のケースでも聞いた皮肉な流れが、今回も見えつつある。

そうであるなら、少し待てば、山室を引き抜けるタイミングは訪れる気もする。

その手腕は、十分、「七村通商」のお眼鏡にかな適うものだろう。真中からは、自分たちに代わって手を汚してくれる人間を探しているわけだから、これほど最適の人材はいない。

しかし、小穂には躊躇ちゆうちよする思いがあった。

というより、山室を推すのはやめたほうがいいかもしれないという気持ちに傾きつつあった。

いくら経営危機だからといって、めったやたらに人を切れればいいというものではない。会社が人で成り立つものである以上、そこへ手を突っこむのには、それなりの慎重さが伴っているべきだ。

「スポマート」には、会社のために、そして多くのスポーツ愛好者のために、日々、こつこつと商品を搬入し、陳列し、勉強して得た知識を提供し、買物をサポートしようとがんばっている社員たちがたくさんいる。小穂は長岡しか知らないが、彼を知っているからこそ分かる。彼のような社員は、ほかにたくさんいるはずなのだ。

そこに冷淡な切り捨てを売りにしているリストラ屋を投入することには、二の足を踏みたくなる。会社再建の劇薬、必要悪として彼の手腕がもてはやされるのだとしても、自分がその一人に加わりたいとは思わなかった。

押上駅近くまで戻ってきて、ふと通り沿いのファミレスを外から覗きこみ、おやと思った。

山室の姿を見つけた。

仕事相手だろうか、四十絡みの男と何やら打ち合わせをしている様子だった。

本来ならキャンディデートとの距離を詰める機会でもあり、せつ

かく見かけたのだからということ、打ち合わせが終わるのを待つても、一言声をかけておきたいところなのだが、今はそういう気にもなれなかった。

見なかったことにして、小穂は帰り道を急いだ。

「鹿子ちゃん、この前の件だけど」

「モリヨシ」の森川を訪ねてから、三日ほどが経っていた。

小穂は、山室の代わりに推すべき人物の選定に入っていたので、花緒里がそう切り出してくるまで、彼女に頼みごとをしていたのを、すっかり忘れていた。

「一人つながったよ。「ビズセレクション」の立ち上げの一人で、執行役員やってるって」

「あ……ありがとうございます」

はまべ よしひろ
浜辺佳洋という男らしい。

山室に関心がなくなったとも言えない。せつかくつなげてもらったからには、会っておかねばなるまいと、小穂はほとんど義務的に、浜辺にコンタクトを取った。

「ビズセレクション」は新橋しんばしにあるというので、第一ホテル東京のロビーラウンジで会うことになった。

約束の時間にラウンジを見渡してみても、小穂はあっと思った。

浜辺が誰か、すぐに分かったのだ。

先日、押上駅前のファミレスで山室と一緒にいた男がラウンジの一角に座っていた。

「わざわざお時間をいただいてすみません。ありがとうございます」
挨拶をしてそう言うと、浜辺は何でもないというように笑ってみせた。

「山室さんのことで何か動いてらっしゃると、うかがいました」
浜辺は言う。「お役に立てれば何よりです」

「ええ、その……山室さんの人柄であつたりとか、あるいは仕事ぶりであつたりとか、そういう諸々のことをお聞きできればと……」
今となつてはそんな依頼にも気持ちが入らず、小穂自身もそのことに少々参りながら口にしたのだが、浜辺は意に介さないように、小気味よくうなずいた。

「人柄は一言で言えば、責任感が強くて面倒見のいい人です」

「え……？」思わず、声が出てしまった。

「別に、本人の耳に届くことを気にして褒めてるわけじゃありませんよ」
浜辺は笑う。

「ええ……ここでの話は、山室さんには一切伝わりません」小穂は念のため、そう言ってみた。「ですから、忌憚きたんのないところを聞かせてください」

「承知しています。本人のいないところでお世辞を言ってもしょうがないですよ」浜辺は言う。「あの人が、〃リストラ請負人〃と呼ばれているのはご存じですか？」

「はい」小穂はうなずく。

「でも、考えてみてください。好きでそんなことばかりをやりたがる人がいますか？」浜辺はそう問いかけてきて、小穂が答えないので見て続けた。「誰かがやらなくちゃいけないからやる……そういう責任感でやってるだけです。でも、やるならとことんという人ですから、それだけが売りのように見られてしまう。そこは損してるなと、僕は思います」

「面倒見がいいというのは……？」

「言葉通りです。山室さんは〔ビズセレクトシヨン〕起業時の大先輩ですし、その後も公私ともに付き合いがありますから、保証できますよ。つい先日、「モリヨシ」を辞めた方の再就職先のマッチングの件で、彼と打ち合わせしてきたばかりです」

「え……辞めた方というのは？」

「言い方は失礼ですが、リストラされた方ですね。山室さんはそういう方々に、うちを紹介して、再就職先を何とか見つけられるよう、フォローしています。もちろん、うちを使ったところで山室さんには一銭も入りませんよ。ただ、辞めた人の再就職が全部決まらな

ことには、リストラが終わったことにはならないんだって、彼は言ってますね。それも、条件が悪いところじゃ話にならない。有能だけれど辞めざるをえなかった人間も多いから、「モリヨシ」よりいい条件で雇う会社もあるはずだって、そういうところでも妥協はしないで大変ですけどね」

浜辺がそう言って笑う一方で、小穂は嘆息していた。何と言っていいか……言葉が出ない。

「それでも、昔取った杵柄きねづかで、あの人のマッチングの目は確かですから、この人間はこういう特性がある、こういう仕事に向いている、なんてことを教えてくれる。そういう情報をもとに求人先を引張ってくる、いい感じで決まっていきます。まあ、「モリヨシ」を出た人全部がうちに來てるわけじゃないですけど、山室さんマターは七十人くらいいて、ほとんど決まりました。あと残ってるのは二人だけですね。どちらも山室さんの評価が高かったんで、条件を上げていた分、手間取りましたが、時間の問題だと思います。今は選考の結果待ちです」

「ビズセレクション」を通しての再就職先フォローは、「メンズシューズKUNO」の頃からやっていたという。

「でも、たいていのところは、ある程度会社の中がすっきりすると、それでリストラは終わり、山室は御役御免おやくごめんってなっちゃうんですよ。

そこが雇われ社長の哀しさというか……でも、あの人も、外から来てそれだけの大きなを振るった以上、自分だけが会社に居残るなんてつもりはないんじゃないですかね。とりあえず、リストラされた人たちの再就職を見届ければという感じで。その手腕が認められて、またほかから声がかかるわけですし、貧乏くじを引かされてるのか、それがあの人の選んだ道ということなのか、何とも言えませんがね」

それが山室の選んだ道であったとしても、好きでやっているのではなく、自分にしかできない仕事だという使命感でやっているのかもしれない……小穂は話を聞いていて思う。

会社というのは、あらゆるステークホルダーの思惑が入り混じる組織だ。社長といえども、雇われでしかも外部招聘された者であれば、その思惑に翻弄ほんろうされずにはいられない。

しかし、山室はそんな中でも、可能な範囲において使命をまっとうし、あらゆる方面において責任を取ろうとする経営者なのだ。

「スポマート」はリストラを必要としている。ただ、それを主導する「七村通商」には、真中を含め、責任を取ろうする者はいない。ベルトコンベアだけが敷かれ、その上で長岡ら現場の社員たちが仕分けられようとしている。

山室が必要だ。

彼以外には考えられない。

浜辺の話聞いて、小穂は考えはがらりと変わった。

7

「私なりに悩みましたが、新時代に乗り遅れまいとする会長のお考えには、大変共鳴しました。文具業界にはまだまだ大きな可能性があると思っておりますし、変革の先導者を務めたい気持ちがございます。今回のお話、謹つとんでお受けしたいと思います」

大手印刷会社の事業部長を務めていた男だった。今は小さな関連会社の役員に収まっているが、めぐり合わせさえよければ、本社の役員になれた逸材いつざいだと戸ヶ里は言っていた。

「ありがとうございます」

森川善次よしつぐが手を差し出すと、この瞬間、「モリヨシ」の次期社長に内定した山田和敏やまだ かずとしが力強くその手を握り返してきた。山室よりは一回り歳がいつているが、その手は森川には若く感じる。

「山室くんはよくやってくれたが、敵も多かった。君には長くやってほしい。十五年くらいはやってもらわないと困るよ。はっはっは」「身体だけは丈夫ですので、お任せください。身命しんめいが尽きるまで、貢献したいと思います」

「航のことも頼んだぞ」

「役目は心得ています」山田は言った。

戸ヶ里の働きもあり、森川が腰を上げてから三カ月も経たないうちに、山室の後継が固まった。

これで、自分の仕事は全部終わった……森川はそんな感慨にふけた。まだ、山室に引導を渡す仕事が残っている……すぐにそう思い直したものの、それで何か気持ちが変わるわけではなかった。

8

「ありがとう。ありがとう」

普段は閉め切られている会長室の応接ソファに腰を下ろした森川が、出迎えた役員連中に向かって小さく手を上げた。

「十分だ。あとは山室くんだけでいい。君らは仕事に戻りなさい。暇を持て余してるわけじゃないだろう。はっはっは」

山室以外の役員たちが笑顔を引きつらせながら、口々に挨拶を言い、部屋から引き上げていく。

山室は、静けさを取り戻したこの部屋と同化するように、風ないだ心持ちで森川の向かいに座っていた。

「山室くん」やがて森川が口を開いた。「この二年、君は実によくや

ってくれた」

「身に余るお言葉です」山室は小さく頭を下げた。

「君が思い切ってメスを入れてくれなかったら、今頃、この会社はご臨終りんじゆうだったかもしれない。九死に一生を得たとはこのことだ」

山室は何も応えず、話の続きを待つ。

「しかし、息を吹き返したからには、また新たな挑戦の旅に出なきゃいけない。まだ病み上がりの身体で、もしかしたら抜糸も済んでいないくらいかもしれないが、会社というのは外に出て戦わなきゃいけない。ここらが区切り時だ。私はそう思う」

「まさに私もそう思います」

山室が同意すると、森川は目をしばたたかせて見返してきた。

「二年間、持てる力を注ぎこんで、私なりに精いっぱいやらせていただきました。すべてが思い通りにいったわけではありませんが、果たした結果については、おおむね満足しています。瑞々みずみずしい気力を持った次の人にバトンタッチできる状況には整えられたのではないかと自負しています。思い残すことはありません。会長にはこうしたチャンスをくださったこと、思う存分やればいいと、我慢強く見守ってくださったことに、心から感謝申し上げます」

山室はそう言って、深々と頭を下げた。

今週に入って、立て続けに吉報が舞いこんできた。

最後まで再就職が決まっていなかった元課長と元次長の二人に、採用の通知が届いたのだ。

粘った甲斐^{かい}があつて、二人とも中堅どころの専門商社と工具メーカーに、「モリヨシ」以上の待遇が約束されての雇用となった。連絡をくれた「ビズセレクション」の浜辺によれば、二人とも新しいビジネスライフに向けて、前向きだという。

ようやく、一区切りついた……山室はそう思った。

だからこそ、森川にもすつきりと、職を退く意思を伝えることができた。

もちろんそれには、戸ヶ里から、森川の意向をそれとなく匂わされていたことも大きく作用した。それがあつたから、森川から会社に出向くという連絡が入ったときには、ぴんときたのだった。

戸ヶ里なりの友情の証なのだろうと、山室は取っている。

さて、この先はどうするか……山室は社長室に戻って考える。

浜辺が連絡ついでに口にしていた。

ヘッドハンターが一人、リファレンスを取りに来たと。

「名前を出しておきたいと思います。山室久志さんとおっしゃいます。在籍企業は文具メーカーの「モリヨシ」です。リファレンスを取り始めて、ある時点までは、私はこの方について、消極的なスタンスに立とうと考えていました。ですが、今では、この方しかいないと考えるようになっていきます」

この日、小穂は七村通商に向き、真中に加え、彼の上司でもある繊維事業本部長や部長らと交えたミーティングで、リファレンスの結果などを話しながら、キャンディデイトを山室一本に絞ることを提案した。

「仕事ぶりはハードで、おそらく短期間のうちに、そちらの期待に沿うような結果を出してくるんじゃないかと思えます。ただ、できれば、数字的なものだけで計画の達成度を判断するのではなく、かじ舵取りを任せた以上、本人が納得できる形に収まるまで、時間的なマージンを与えていただきたいと思えます」

「もちろん、我々は、直接経営するような余裕がないから人を探しているんであって、その人の邪魔をするつもりも、手柄を取るつもりもありませんよ。期待通りの方なら、経営が落ち着いてからも、続けてもらって一向に構いません」

真中はそう言い、事業本部長に意見を求めるような視線を送った。「いいんじゃないの」本部長が短く、了承の言葉を口にした。「問題

は受けてくれるかどうかだな」

「そうですね」小穂は言う。「了承をいただいたからには、全力で当たらせていただきます」

「時間的にも、いつまでも待てるものではありませんから、なる早はやでお願いしますよ」

「分かりました。がんばります」

三人に発破はっばをかけられ、焦る気持ちはあつたが、自分が見込んだキャンディデイトに当たれる喜びのほうが強かった。

「七村通商」の高層オフィスを出る。国道246号沿いを歩くあし脚に、すっかり深まった秋の夕風がひんやりと撫でつける。

問題は受けてくれるかどうか。

タイミングさえ合えばとは思うが……そこは祈るしかない。

早速、アポを取っておこうか。

そう思い立ったものの、山室の携帯番号を知らないことを思い出して、唇を噛む。

また会社に電話するしかないが、それなら、オフィスに戻って落ち着いてからのほうがいいか……。

そんなことを考えていると、手にしていた携帯が鳴った。

知らない番号。

誰だ？

「もしもし？」

〈もしもし〉男の声が聞こえた。〈山室ですが〉

「あ……」

不思議だ。

この仕事……人と人、人と企業を取り持つ中で、それぞれの能力や条件や環境といった判断材料と同じくらい、縁とも言うべき見えない何かがあるのだ。

こういうタイミングもその一つ。

「ちょうど今、山室さんに電話しようと思ってたんです」小穂は言った。

面白いなと思う。

〈その仕事……私にしかできないことですか？〉山室が訊く。

その瞬間、瞬間に、戸惑いがあり、発見があり、確信がある。

「はい、そう思うからこそ、山室さんをお願いするんです」

やっぱり、この仕事、面白い。

〈つづく〉